岡球子「面構 浮世絵師 鍬形蕙斎・戯作者 山東京伝」（昭和55年 2曲屏風1双 各縦1・5…×横1・50…）

「蕙斎は、その肖像画に男性的な風格、眼鏡を用いて読書している様子、当時の輸入（密輸）品としき眼鏡にもその頃をしのぶ面白さ。学を好む勉強家の面構にあわせ、その傑出された職人尽中『たまやの花火』の略図をバックに用いてみた。（中略）山東京伝は、酒好家で酒落者であった様子や一ぷくの煙草をたしなみながら、自分の作品の『気替面歳作問答』の事を思い出している図である。」（作家の言葉）

球子は、昭和41年「再興第51回日本美術院展覧会」において「面構 足利義満 足利義政」の3部作を発表、その大胆で奇抜な構成に多くの人々の注目が集まった。61歳のスタートであったが、その後毎年〈面構〉シリーズの制作を続け、40年間にわたって新作を発表し続けた。本図は第16作目で75歳の時の作品であり、浮世絵師と戯作者を組み合わせた作品では「葛飾北斎 滝沢馬琴」「歌川国貞 柳亭種彦」に続く3作目である。

【主任学芸員 中村麻里子】

岡山県立美術館のリニューアルについて

岡山県立美術館は、昭和63年(1988)3月に開館して以来21年が経過します。これまでメンテナンスに配慮し、大事に使って来ましたが、各所に傷みや汚れが目立つようになりました。また、平成22年秋には岡山で国民文化祭の開催が計画されていることもあり、若干の設備追加と修繕を施し、ユニバーサルデザインなどにも配慮して、リニューアルすることにしました。

3月31日まで休館し、工事を進めています。工事の主な内容は、次の3点です。

（1）来館者の安全確保、ユニバーサルデザインに基づいた修繕
- 階段の手すりを改造し、段鼻を着色塗装して来館者の安全確保に配慮します。
- 館内のサインを統一・刷新し見やすく分かりやすいものにします。

（2）来館者に優しい空間の提供
- 館内の照明を改善し、明るくくつろぎやすい空間にします。
- オストメイト対応トイレを設置するなどしトイレを一部改修します。
（オストメイトとは…直腸がんや膀胱がんなどにより、臓器に機能障害を負い、腹部に人工的に排泄のための孔（ラテン語でストーマ）を造設した人のことです。日常の排泄行為には様々な苦労があります。）
- 休憩コーナーを設置し、ベンチを増設して休める場所を増やします。

（3）展示・鑑賞の環境をよりよいものに整備
- 2階展示室の壁・パネルの張替。これまでグレー系統の色でしたが、白に近い色に変更します。また、展示ケースを修繕します。
- 地下の展示室は、壁面と移動パネルを塗装し、床の補修とインターネット配線を施し、新時代のアートにも対応出来る態勢にします。
写真は地下の展示室の壁面塗装工事中のスナップです。壁の張替・塗装のあと、作品を展示できるまで、乾かすなど養生の期間が必要になります。
また、地下のホワイエはこれまで、他館からのポスターを掲示して来ましたが、展示パネルを増設し、展示スペースとしても活用できるようにします。

オストメイト対応トイレ

古いクロスが剥がされた2階展示室

壁面塗装中の地下展示室

研修室に設置された流し台

その他、研修室に水場を設け、ワークショップなどで、水を使う催しができるようにし、一層多様な利用に向けて整備することにします。

工事関係は、以上ですが、職員もこのリニューアル期間に、今後の美術館のあるべき姿、社会の中で果たす役割、それぞれに求められているものなどを見つめ直し、心気を一転して仕事に取り組んでいきたいと決意しているところです。

【学芸課長 妹尾克己】

学校と美術館の連携～学校団体観覧～（対話型鑑賞コース）

学校と美術館の連携については、「未来の来館者」をじっくり育てようということから当館でも早くから取り組んできています。また、2002年の学習指導要領の改訂や2008年に告示された新しい学習指導要領をうけて、「鑑賞」や「連携」についてより一層の活性化が求められています。

当館でも4つの学校団体対応プログラム右（右下表）を用意し、今年度も多くの小中学校に美術館学習の場として活用をしていただきました（各プログラムの対応数については岡山県立美術館年報平成20年度版をご参照下さい）。そんな中、はじめて高校が対話型鑑賞コースでの美術館学習を選択されました。勿論、いきなりの活用ではありません。担当教諭はここ数年美術館学習を当館で行っていましたが、今ひとつ対話型鑑賞コースでの美術館学習を躊躇されていました。そして今回、担当教諭は年度当初より足繁く美術館を訪れ他団体の対話型鑑賞対応を何度も見学し、生徒にとってこの鑑賞法が必要かどうかをじっくり検討後、活用を決断するという念の入れようでした。学校の授業として美術館を活用するわけですから、教育的効果（その場で何が起こり、起こっていることが生徒にとって必要なことかどうか）を見極めることは学校の教員として当然のことです。

この高校対応を一例に、当館のVTP（※1）による対話型鑑賞について考えてみたいと思います。以下は、当日のプログラムと美術館学習後のアンケート（※2）です。

【当日プログラム】

○1年生 美術選択者74人 クラスごと4日にわかれて来館
1. 出迎え &Welcome（5分）
2. アートゲーム “○×クイズ”（20分）
3. 対話型鑑賞（45分）

【アートゲーム “○×クイズ” について】

①よかった 74% ②ややよい 25%
③ややよくない 1% ④よくない 0%

□今まで絵を見るときに、大まかな雰囲気しか捉えていなかったが、このゲームでは細かいところまで見ることが必要だった。そう思っても、まだ見ることが出来ていない部分もあった。

□細かいところまで見ることで新しい発見があるし、絵全体の印象も変わるかもしれない。ゲームは楽しかったし、絵を詳しく見ようというこも大切だということがわかったのでゲームをしてよかった。

【対話型鑑賞について：74人中7割の生徒が初めて対話形式による鑑賞を体験】

①よかった 75% ②ややよい 18%
③ややよくない 4% ④よくない 3%

「①よかった」

□自分が思ったことだけでなく他人の意見も聞くことによって、新たな発見につながり、より深く絵について考えることが出来た。

□絵を鑑賞するとは思っていたよりも簡単で、誰でも楽しめることがわかった。絵が描かれた時代やその背景を知ることにより、作者が伝えようとしたことがよくわかるようになり、その絵の持つ美しさをより深く知ることが出来た。

□…人で見て回るのとは違った楽しさがあって、他の人がどう感じて、どのようにこの絵を見ているのかを知ることで、新たな発見があり、自分の考えを言うことで、他の人に自分がどのように絵を見ているかをわかってもらえるので楽しい。光の当たり方や、見ただけではわからないような心の面も学べたと思う。同じ絵は描けないけど、今日見た絵を参考に作品をつくっていきたいと思った。

「②ややよい」と答えた生徒の感想は「①よかった」と回答した生徒とほぼ同じ。問題点として「自分のペースでゆっくり見たい」「自分の思うことをうまく表現できたらよい」「もっとたくさん絵を見たかった」と記述。

「③ややよくない」

□同じ絵を見た人の別の意見を聞いたり、美術館の方のお話を聞いたりすることで、新たな発見があったり自分の考えが深まったりすると思う。ただ、私は絵を鑑賞するときは自分で自由に想像して、勝手に飛躍させたりして、それを人に話すのは好きではないので、対話形式の鑑賞は好ましくなかった。

【担当教員から見た課題】

○自分の感じたことや考えたことを述べるのが苦手な生徒が一部いる。

○県美では、小中学生や大人を対象とした対話形式の鑑賞は経験があるものの、高校生を対象とした経験がなく、どのレベルで対話が出来るか模索の段階である。スタッフと生徒の息が合わない場面も見られた。

○2～3点を取り上げた対話形式の鑑賞では、展覧会の全体像を知ることは難しかった。

○生徒の発言に関連づけて、作家の意図や作品の成立背景などを説明することが必要になる場合もある。

上記アンケートの結果から、当館の対話型鑑賞の可能性と課題が見えてきます。最近スタッフと話題になるのが、『“作品をみる” ということを軸に対話型鑑賞を行っているのか、思考力の向上やコミュニケーション能力の向上だけに焦点があたっている対話型鑑賞になってはいないか、“作品を一緒にみる” というシンプルな行為がちゃんと軸にあるのか』ということです。作品を素材としてみるのではなく、作品が作品として存在するとはどういうことなのかを問い続けるような対話型鑑賞を目指していきたいと考えています。

先日『“美術館と学校の連携” という同一の言葉のもとには、多様な社会構成員が主体的に参加する創造的活力に満ちた感性文化システムを発展させるか、それとも、美術館を “学校化”（制度「学校」による浸食）すると同時に学校美術を “美術館化”（既存価値規範を所与とする「鑑賞」への傾斜）するか、という暗黙の選択が潜んでいるのではなかろうか』（※3）という記述に出会い、学校と美術館の連携を考える上での指針を示していただきました。

今後も学校現場の先生と美術館スタッフ、また美術鑑賞教育研究者を交えながら、対話型鑑賞だけでなく、よりよい美術館学習について「対話」を続けながら、恒常的な学校と美術館の連携を模索していきたいと思います。

＜岡山県立美術館学校団体観覧プログラム＞

A：自由見学コース（15分程度）
ボランティアによるマナーガイダンス・美術館の概要説明のあと、自由に鑑賞を行うコース。

B：グループ案内コース（40分程度）
岡山の美術展をグループごとにボランティアが対話や解説を交えながら案内するコース。

C：対話型鑑賞コース（40分程度）
VTP（※1）による対話型鑑賞でご案内するコース。（時間に余裕がある場合、ゲームを通して鑑賞を深める “アートゲーム” もセットにすることが出来る。）

D：特別展解説コース（15分程度）
特別展担当学芸員が簡単な解説を行ったあと、自由に鑑賞するコース。

※1：岡山県立美術館では、「作品そのものをしっかり見て欲しい」「同じ作品でも様々な見方、受け止め方があることに気づき、認め合って欲しい」という願いからビジュアル・シンキング・プログラム（Visual Thinking Program、略称VTP）という独自のプログラムづくりに取り組んでいます。これは、来館者が鑑賞ナビゲーターと一緒に展示された作品を見て、自分の意見や感想をことばにして人に伝え、人の意見や鑑賞をよく聞き、さらにしっかりと作品を見ながら、自分なりの見方や考え方を深めていくという方法を基本としています。

※2：アンケートは岡山県立岡山朝日高等学校美術科教諭岡本昌康氏がおこなったものです。

※3：『現代の眼574 東京国立近代美術館ニュース 2-3月号 2009〔特集〕美術館と学校Ⅱ 長田謙一（首都大学東京教授）

アートゲーム “○×クイズ”

ナビゲーターと生徒の出会い

対話型鑑賞

【学芸員 岡本裕子】

近ごろの美術館 20年を振り返って…
―はじめてのお客様―

岡山県立美術館は、1988年3月18日に開館しました。それ以来20年の間にハード面に生じた傷みを補修し、また、館内のバリアフリー設備を整えるため、2008年12月8日から2009年3月末まで休館中です。私が岡山県立美術館に来て約3年、観覧者・作品のない展示室はこれまでにない表情を見せています。工事が始まるまではひっそりと静まりかえり、現在では工事の作業音が聞こえています。

開館以来、実に多くの方にお越し頂きましたが、約20年前に当館の開館を心待ちにしてくださっていた方がいました。このたび、そんな「県立美術館第一号」のお客様にお会いする機会がありました。現在は岡山理科大学教授の淺田伸彦先生です。淺田先生は岡山理科大学助手時代に当館開館のことを知り、最初にお越しくださった方です。「No.1」の刻印された半券を今でも大事に保管しておられます。理学部で教鞭を執る先生は、専門書が堆く積まれた研究室で、当時のことを懐かしそうに語ってくださいました。その日の一般公開は午後1時からで、開館記念特別展「岡山の絵画500年-雪舟から国吉まで-」を開催。初日の入館者数は708名でした。

開館記念特別展チラシ

淺田先生

1988年は、岡山県の三大プロジェクト－「瀬戸大橋」「新岡山空港」「岡山県立美術館」－が始動した年です。全国各地では公立美術館の建設が引き続き進み、当館といわば「同期」とも呼べる1988年生の美術館に、名古屋市美術館（4月）、高松市美術館（8月）、ふくやま美術館（11月）などがあります。くしくも名古屋市美術館も現在改装工事中でした。ただし、名古屋市美術館が工事中なのは外部のみで、美術館自体は開館しています。

2008年度は開館20周年記念行事を行い、この20年を振り返る良い機会となりました。もちろん経済・社会情勢の変化など、20年間で大きく変わったこともありますが、「温故知新」の言葉を胸に、新年度からも取り組んでいきたいと思います。

【学芸員 細田樹里】